

出典 西條剛央 2013 日本最大級となった「ふんばろう東日本支援プロジェクト」は、どのような支援をどのように実現したのか？ -構造構成主義を基軸としたボランティアリテラシーの射程 ボランティアリズム研究, 2, 15-28.

日本最大級となった「ふんばろう東日本支援プロジェクト」は、 どのような支援をどのように実現したのか？

～ 構造構成主義を基軸としたボランティアリテラシーの射程

早稲田大学大学院商学研究科MBA専任講師・ふんばろう東日本支援プロジェクト代表 西條 剛央

1000年に一度といわれる未曾有の大震災をきっかけに「ふんばろう東日本支援プロジェクト」を立ち上げた。その活動は瞬間に全国に広がり、数十のプロジェクト、支部、運営チームと2900人以上のメンバーからなる日本最大級のプロジェクトに成長した。本論文ではまず「ふんばろう東日本支援プロジェクト」がどのような支援を行ってきたのか、主なプロジェクトや支部の活動について概説した。そして、それが構造構成主義というメタ理論により可能になったものであることを論じた。さらに構造構成主義の観点から今後の支援やボランティア活動を活性化するための「ボランティアリテラシー」について議論した。

【キーワード】 構造構成主義 ボランティア 信念対立 ソーシャルメディア

1. ふんばろう東日本支援プロジェクトはどのような支援を実現したか？

(1) はじめに

1000年に一度といわれる未曾有の大震災が東日本を襲った。私は仙台出身であり、親戚は津波で行方不明となった。そんな中、南三陸町に物資を届けに行ったことをきっかけに「ふんばろう東日本支援プロジェクト」(以下「ふんばろう」)を立ち上げた。その活動は瞬間に全国に広がり、数十のプロジェクト、支部、運営チームと2900名ほどのメンバーを擁する日本最大級のプロジェクトに成長した。まず以下に活動の概要を示す。

(2) 物資支援プロジェクト

2011年4月1日に立ち上げた「物資支援のプロジェクト」を通じて総計3000カ所以上の避難所、仮設住宅、個人避難宅等に2万8000回以上、70万個以上に及ぶ直接支援を実現した。また被災地のお店から購入したものを被災者に届ける仕組みの「復興市場」を通じて約4万6000個以上の物資支援が行われた。さらにインターネットショップAmazonの「ほしい物リスト」を援用することで家電や自転車、生活物資など3万4000個以上を

届けることができた。個人の要望に基づく物資支援は2012年3月末で終了し、2012年4月より、外部団体やふんばろう内のニーズ調査に基づく物資支援へ移行した。また2012年4月からは、被災地で飼い主を失った動物を保護している人や団体に対して餌などの物資を支援する「動物班」が立ち上がり、1万個以上の物資支援を実現している。

さらに「大量物資支援プロジェクト」では、岐阜県、愛知県、宮城県、福島県、大分県、大阪市、仙台市、横浜市で行き場を無くした大量の物資や、さらに株式会社ニトリ、三井不動産販売株式会社、ライオン株式会社、シンガポールのNGOマーシーリーフが提供してくれた物資などをマッチングして、4tトラック200台分以上もの膨大な物資を被災者に届けた。

(3) 家電プロジェクト

5月に入ると「家電プロジェクト」を立ち上げた。行政や日本赤十字社の支援が受けられない個人避難宅をはじめとして、冷蔵庫、洗濯機、炊飯器、扇風機、アイロン、冬物家電など、総計2万5000世帯以上に家電を届けた。この全国に被災者に向けた家電支援をきっかけに、

日本最大級となった「ふんばろう 東日本支援プロジェクト」は、
どのような支援をどのように実現したのか？～構造構成主義を基軸としたボランティアテラシーの射程

被災者の様々なニーズをアンケートをとることで心の支援につなげる「絆プロジェクト」を立ち上げ、さらに福岡大学の長江信和准教授の「ユビキタス・カウンセリング」などと連携して、被災者の心をケアする人材を育成するMHF(メンタル・ヘルス・ファシリテーター)の資格取得の講座を開催するなど物から心の支援につなげていった。

(4) 重機免許取得プロジェクト

また同じく5月には自立支援を目的とした「重機免許取得プロジェクト」を立ち上げた。これは被災した人たちに重機の免許を取得してもらい、復興事業での雇用につなげようというプロジェクトである。職を失った被災者が復興関連の仕事に就きたくても、重機の免許がないためなかなか働き口が見つからなかったことから、寄付を集め免許取得を支援することを提案して始まった。これまで現地の企業と連携しつつ、1000名以上の免許取得の費用を全額サポートした(現在も支援を継続している)。さらに即戦力が求められる被災地の現場に対応できるようマンツーマンの教習によるスキルアップトレーニングのプロジェクトも行っている。

(5) 漁業支援プロジェクト・サンドバック

また7月頃立ち上げた「漁業支援プロジェクト」では漁船や漁具を支援した。特に、ワカメの養殖に欠かせないサンドバックを提供する「サンドバックプロジェクト」は全国の支援者を巻き込み、総計10万枚以上のサンドバックを南三陸町の30浜以上の漁師さん達に渡していき、漁業再開の後押しとなる支援を実現した。

(6) ミシンでお仕事プロジェクト

また被災したお母さんたちから「支援物資の服のサイズがあわない。ミシンがあればお直しして活用できるように」「仮設住宅のカーテンの裾が短く、冷たい空気が入ってきて寒いので裾ぬいをしたい」といった要望があがってきた。また「町も仕事もなくなったが、子どもが小さくて外に働きに出ることができない。仮設住宅の中でミシンを使った仕事をしたい」といった現地の声を受けて「ミシンでお仕事プロジェクト」を立ち上げた。

これは、被災したお母さん方にミシンやアイロン、裁縫セットなどのミシンセットをお渡しする「物資支援」

と、ミシンを使えるようになるための講習会による「人材育成支援」、そしてミシンをお仕事につなげるための「自立支援」の3つ柱からなる。これまで、400人以上の方々にミシンセットを渡し、スキルアップ講習会などを実施してきたところ、サークルがいくつも立ち上がり、初回の講習会参加者が先生となって他の人にミシンの使い方を教えるといったつながりが生まれている。最近では「南三陸ミシン工房」「ポケモンチャリティバックプロジェクト」として作品を売り出しており、70社以上の企業を巻き込み、東北で被災した女性たちの雇用を生み出して自立した生活を営むためのサポートをしている。

(7) 手に職・布ぞうりプロジェクト

また、現地のお母さんの自立支援として「手に職・布ぞうりプロジェクト」も立ち上げた。南三陸 陸前高田・石巻・東松島で布ぞうりの講習会を行い、コミュニティ作りを支援。さらに希望者にはスキルアップ講習を行い、商品として売れる布ぞうりを作れるよう指導し、ふんばろうのネットワークを活かして販売した。現在は「布ぞうりサポーターズ」としてハギレやミシン糸など、布ぞうりに必要な素材を提供してもらえる企業と現地の編み手さんをつなぎ、また全国の支援者から着古しのTシャツを集めるといった後方支援の活動を行っている。

(8) 就労支援プロジェクト

また被災自治体に配分されている国の予算を就労支援に活用するため、雇用・人材支援のノウハウを持つ株式会社パソナと資格取得のスキームを持つ株式会社日建学院と連携することで「就労支援プロジェクト」を立ち上げた。2012年7月より、陸前高田市と連携して、地域のために働きたいという希望を持つ人に対して、地元の産業を支える上で必要な知識やスキルを習得できる研修機会を提供し、終了後には市内企業で働ける場をコーディネートすることで、企業の人材採用と個人の就職決定の双方をバックアップする「就労創出支援プロジェクト」を実施している。大船渡市では、同様の趣旨で建設業界に特化して「震災復興建築人材育成・就職支援プロジェクト」を進めている。このように地域の復興・産業振興に取り組む企業と、仕事を通して地域の復興・産業振興に貢献したいという個人を円滑にマッチングする仕組み

づくりと実践に取り組んで成果をあげている。

(9) おたよりプロジェクト

また、2011年7月には、協力関係にあった中村祐子氏が立ち上げた「お手紙プロジェクト」の姉妹プロジェクトとして、中村氏のノウハウ提供のもと、全国の支援者からの手紙を集めて被災者に直接届ける「おたよりプロジェクト」を始動させた。それはスタッフが家電プロジェクトやハンドメイドといった他のプロジェクトと連携しながら、家電などの必要物資と一緒に、全国の支援者から預かった手紙を640人一人ひとりに届けるプロジェクトだ。こうした活動は、現地の人の話を傾聴することで、自然と心の支援にもつながっていった。

さらに津波被災地には郵便局もなく、ハガキや切手が入手にくいという声に応えるために、全国の支援者から集めた切手約2万2500枚、ハガキ約5万2900枚、レターセット約9500セットを被災地に送った。これによって物資や手紙を送ってくれた人との手紙のやりとりがはじまり、被災者と全国の支援者とのご縁をつなぐ役割も果たした。「ふんばろう」でいつしか合い言葉となった支援から「始縁へ」を積極的に実現するインフラとしての役割を担ったのである。「おたよりプロジェクト」は活動から一年が経過したところで現地のニーズも少なくなってきたことから活動を終えたが、心温まる手紙のやりとりを中心に、2012年3月、チャリティブック『忘れない 被災地への手紙 被災地からの手紙』¹として刊行された(現在「翻訳班」と「電信書籍プロジェクト」により英訳化が進められている)。

(10) ハンドメイドプロジェクト

被災地に手作り品を送る「ハンドメイドプロジェクト」には、家庭にしながらもできる支援として50代や60代の方も数多く参加している。このプロジェクトは2011年の夏の「扇風機プロジェクト」の作業の過程で生まれた。被災地に扇風機を送る作業をしている時に、箱の中に手作りのアクリルタワシを入れる人がいた。当時、被災地はまだ水が不自由でタワシが重宝されたので、それを見た女性スタッフが、タワシや小物を作業の息抜きに

つくるようになったのである。夏場には被災地から、「ドアを開けて風通しをよくしたいが、仮設住宅の中が丸見えになるから暖簾がほしい」という声が届いた。そうした希望に応じて手作り品を送るうちにプロジェクトは拡大し、秋ごろからはツイッターやホームページ経由で手作り品の公募が始まった。ピークは年末のクリスマス・オーナメントの募集であり、日本全国、海外からも品物が届き、このときだけでその総数は1万点を超えた。そうして集められた手作りの物資はスタッフによって仕分けされ、ラッピングを経て被災地でのイベントで配られたり、仮設住宅等で無料配布された。ハンドメイド品の物資支援の他に、ハンドメイドのワークショップを開催し、被災された方々に手作りの楽しさと笑顔を広げる活動もおこなわれた。

(11) ガイガーカウンタープロジェクト

放射線を正しく計測できるよう高性能のガイガーカウンター(放射線量計)を正しい測定方法や知識とともに無料で貸し出す「ガイガーカウンタープロジェクト」を立ち上げた。まず測定の専門家をリーダーとして講習と実習を重ね、スタッフが正しい放射線測定法を習得した。その上で、貸出システムと運営体制を整え、2011年8月にガイガーカウンターの貸出を本格始動させた。その後、要望に答える形で貸出対象エリアを、茨城県、栃木県、群馬県、宮城県へと拡大していった。さらに利用者や一般の方を対象としたガイガーカウンターの使用法の講習会を開催した。また『やっかいな放射線と向き合って暮らしていくための基礎知識』²を福島県内の全中学校、高校、図書館、公民館図書室などに贈呈していった。

(12) PC設置でつながるプロジェクト

被災地では、当初からパソコンのニーズは多かったが、高額であることに加え、プリンターやソフトウェア、ウイルスセキュリティソフトなど一式揃える必要があり、また中古パソコンを送る際には通常の家電と異なり中身を完全に消去し、再インストールする作業が必要など壁は高かった。しかし、ヤフージャパン、富士通、NTTデータ、トレンドマイクロ、ボストン・サイエンティフ

1...西條剛央・ふんばろう 東日本支援プロジェクト おたより班「被災地からの手紙 被災地への手紙 忘れない。」大和書房 2012年
2...田崎晴明「やっかいな放射線と向き合って暮らしていくための基礎知識」朝日出版社 2012年

日本最大級となった「ふんばろう 東日本支援プロジェクト」は、
どのような支援をどのように実現したのか？～構造構成主義を基軸としたボランティアアリエラシーの射程

ミックジャパン、IBM人材ソリューション、アイ・ディ・ケイ、日本マイクロソフトなどの諸企業の協力により、1000台規模の支援が可能になり、「PC設置でつながるプロジェクト」が本格始動した。宮城支部のチームを中心に、要望のあった公共スペースに次々と設置していき、被災地三県、200カ所以上の仮設住宅のインフラを整備した。被災地で放課後学校を運営する「NPOカタリバ」にもパソコンを100台規模で支援するなど、被災地で実効性の高い支援を行っている団体のインフラ整備のバックアップも行った。また、PCを活用できるようになりたいという現地の要望に応じて「PCふれあい教室プロジェクト」も始動させた。

(13) 学習支援プロジェクト

狭い仮設住宅や、自宅の1階が被災し2階だけで生活している家庭では、集中して勉強できるスペースがない。また震災前は勉強を見てくれた家族も、子どものために時間を割くことが難しくなっているのが現状である。加えて、塾や予備校も十分に復旧しておらず、学校の校舎自体が被災している地域も少なくない。今、子どもたちにとって最も大事なことは、安心して勉強できる環境を確保することである。また子ども達も深く傷ついている。みんなで集える学び場を作り、子ども達に寄り添うことで自然な形で心のケアにつなげることができないか。そうした問題意識から塾などの十分な学習環境がない地域を中心に「学習支援プロジェクト」を立ち上げた。

具体的には、被災三県の各地で、学習サポート会「学び場・ふんばるんば」「寺子屋・いきいき世代」を開催。仮設住宅の集会所や学校などの施設をお借りして、小学生～高校生までの少人数の勉強会を行い、受験勉強や授業の復習のサポートができる大学生・社会人を派遣している。2012年度より、ボランティア指導者の派遣に加え、現地スタッフに指導を業務委託することによって今までよりも高い頻度で学習会を行えるようにした。

また受験直前対策や学校の授業の復習を促進するため、「PC設置でつながるプロジェクト」と連動しつつ、ニッケンアカデミーのインターネット教材と問題集を使って、合計195名の小中高生に無償で教材提供を行った。また学習内容に関する質問や相談も受け付け、特に中3生に

対しては担任制をとることで電話やメールなどで定期的に学習アドバイスを行うなど遠方からのサポートの仕組みも充実させた。

(14) エンターテイメントプロジェクト

2011年初夏、緊急支援や必要支援がようやく落ち着き始めた時期に、アート の力で被災地へ元気を届け、被災された方々の心を潤す目的で「エンターテイメントプロジェクト」が発足した。現地のニーズを拾い、多ジャンルのアーティストがコラボして、被災した小学校への楽器や花の提供、避難所・仮設集会所でクラシックやジャズ演奏・エアリアル・人形劇・絵画等を通して喜びや癒しを届ける活動を行った。第2ステージは心の希望支援を目的として復興イベントプロデュースや仮設での様々なイベントに参加し、また歌謡曲伴奏や音楽・アートのワークショップなど来場者参加型のエンターテイメントも積極的に実施した。また被災地外ではゴスペル・ラダンス・演劇・音楽・朗読・ストリートオルガンといった様々なチャリティーイベントを通して支援の輪を広げていった。

(15) 給食支援プロジェクト

また、石巻市などの被災自治体の小中学校では、2011年の夏になっても、魚がのっているご飯と牛乳パックといった簡易給食が続いていた。育ち盛りの子どもたちがあまりに不憫だということで、給食のおかずなどを支援する「給食支援プロジェクト」を始動させた。これは、要請があった小中学校で2011年11月中旬まで続けられた。

(16) うれしいプロジェクト

演出家である宮本亜門氏をリーダーとして、「ふんばろう」の自立支援に寄付されるチャリティーオークション「うれしいプロジェクト」が立ち上がった。事務所の壁を越えて、市村正親、成宮寛貴、藤原紀香、大竹しのぶ、木村佳乃、佐藤隆太、森山未來、城田優、高嶋政宏、森公美子、ソニン、別所哲也、井上芳雄、松田美由紀、彩吹真央、石丸幹二、浦井健治、南果歩、といった著名人が出品協力してくれた。そして2012年1月の宮本亜門作・演出『アイ・ガット・マーマン』公演では、出品会場ともなった株式会社東宝の全面協力によって、「ミシ

ンでお仕事プロジェクト」や「手に職・布ぞうりプロジェクト」の物販が行われた。その結果、ほとんどの商品が完売となり、仮設住宅や個人避難宅のお母さんたちに大変喜ばれた。

(17) 緑でつながるプロジェクト

元々被災地では花や野菜を育てていたひとは多かったが、仮設住宅では個人の花壇や畑を持つことができないため、入居者は植物を育てる楽しみを持てずにいた。また多くの地域では抽選で仮設住宅の入居者を決めたためにコミュニティがばらばらとなり、近所の人とコミュニケーションがとれないという問題があった。そこで2012年度になってからは、できるだけ多くのお花好き、植物好きな方々に、植物を育てる楽しみや、園芸を通してコミュニケーションする機会を提供する「緑でつながるプロジェクト」が立ち上がった。これも被災地三県の仮設住宅を中心に広がっている。

(18) その他

ふんばろうの活動やそれを支える考え方を広く広め、今後の防災教育にも役立ててもらうために、ふんばろう関連の書籍『人を助けるすんごい仕組み』³⁾被災地からの手紙被災地への手紙⁴⁾の印税を全額支援活動に充てる「チャリティーブックプロジェクト」を立ち上げた。

また関心が低下する中、継続的に支援を続けるための資金的なインフラを整備するために、毎月一口1000円からの継続支援が可能な「サポータークラブ」の仕組みも構築した。これにより「ふんばろう」の継続的な活動が可能になった。

その他にも「命の健康」「マンガ・イラストチャリティーオークション」「箱モノ支援プロジェクト」「ふんばろう商店」といった様々なプロジェクトが活動しており、また2012年に入ってからは「大川きぼうプロジェクト」「ふんばろう山元町」といった地域特化型の復興支援プロジェクトも始動している。

さらに、岩手、宮城、福島といった前線の支部だけでなく、また、府中、名古屋、大阪、京都、神戸、岡山、

山口、九州、ロサンゼルスなどの後方支援支部も立ち上がり、全国的な支援体制が整っていった。特に、岩手、宮城、福島の前線支部は各プロジェクトや後方支部と効果的に連携し、それぞれが地元のニーズに合った実効性の高い活動を行った。

こうした支援実績は日本赤十字社や日本経済団体連合会、参議院の憲法審査会、内閣府(防災担当)にも認められ公式シンポジウム等に招聘されるに至っている。こうして2011年4月1日にプロジェクトを立ち上げてから、2年足らずで「日本最大級のボランティア団体」といわれるようになったのである。

2. 変化する被災地のニーズにどのように対応し、多数のプロジェクトの運営を可能としたのか?

(1) プロジェクトの背景思想としての構造構成主義

しかしながら、私はこれまでボランティアをやったこともなければ、プロジェクトを立ち上げたことも事業を起こしたこともない。では、なぜ、まがりなりにもこのような大規模プロジェクトを運営できたのか。こうした支援プロジェクトのバックボーンには、人間科学の原理として体系化したメタ理論である構造構成主義(Structural-constructivism)が据えられており⁵⁾、これにより現地の急激な状況の変化にも対応しながら、効果的な支援を実現できたという部分は大きい。つまり「構造構成主義」といういかなる状況でも適用可能な考え方を身につけていたことから、未経験の現場においても、その都度ゼロベースで実効性の高い方法を打ち出すことが可能になったのである。

もともと、構造構成主義はフッサールの「普遍学(Universalwissenschaft)」⁶⁾の確立といった理念を継承発展させたものであり、“学の根本原理でもあることから、最近では「構造構成学」(Structural constructology)と呼ばれることもある⁷⁾。構造構成主義の思想的系譜は、認識論としてフッサール(Husserl, E.)の現象学⁸⁾とそれを継承発展させた竹田青嗣⁹⁾、西研¹⁰⁾の「現象学」、存在論ではロムバツハ(Rombach, H.)の「構造存在論」

3...西條剛央『人を助けるすんごい仕組み ボランティア経験のない僕が、日本最大級の支援組織をどうつくったのか』ダイヤモンド社 2012年
4...文献[1]
5...西條剛央『構造構成主義とは何か 次世代人間科学の原理』北大路書房 2005年
6...Husserl, E. (1973) Cartesianische Meditationen. Haag: Martinus Nijhoff, S (浜渦辰二(訳)『デカルトの省察』岩波書店, p.33 2007年)

日本最大級となった「ふんばろう 東日本支援プロジェクト」は、
どのような支援をどのように実現したのか？～構造構成主義を基軸としたボランティアテラシーの射程

11、記号学ではソシュール(Saussure, F. de.) の「一般記号論」¹²と丸山圭三郎の「記号論的還元」¹³、構造論や科学論としては池田清彦の「構造主義科学論」¹⁴といったものからなる。すなわち、現象学、存在論、認識論、記号論、構造論、科学論といったそれぞれの哲学分野の最高到達点というべき理路を有機的に統合、発展させることにより新たに開発したメタ理論なのである(詳細を議論すると難解になるため、本稿ではここではそうした専門的な理路に関しては最小限に留め、適宜そのエッセンスを解説する)。

構造構成主義の体系的な理論書が公刊されたのは、2005年だが、その後、医療論、人間科学的医学、感染症論、看護学、看護学教育、助産学、障害論、QOL理論、チーム医療、異職種間連携、医療教育、健康不平等論、作業療法、理学療法、心理療法論、臨床心理学、精神医療、認知運動療法、認知症アプローチ、実践原理論、リハビリテーション論、EBM、NBM、EBR、パターンリズム論、インフォームドコンセント論、ソーシャルワーク、歴史学、メタ研究法、質的研究法、論文の公共性評価法、統計学、生態心理学、実験研究論、社会学、教育学、教育指導案作成法、自己効力理論、アサーション理論、メタ理論構築法、心理学論、文学論、理論論、他者論、妖怪論、メタ理論構築法、発達心理学、縦断研究法、ダイナミック・システムズ・アプローチ、英語教育、英語教育学研究法、日本語教育、音楽教育、学融論、議論論、信念対立論、社会構想法、職業リハビリテーション、地域福祉活動評価法、メタ科学論、公教育「正当性」論、公教育実践論、社会関係資本論といった様々な領域/テ

ーマに導入・応用されてきた¹⁵。

(2) 方法の原理: 方法がなければ作ればいい

そうした汎用性は、領域やテーマを問わず有効性を発揮する構造構成主義原理性によって可能になったと考えられる。しかし3.11.以後、未曾有の震災という現場でその力を発揮することになるとは夢にも思わなかった。特に「ふんばろう」を進めるにあたって有効性を発揮した理路は、「方法の原理」である。

方法とは、「特定の状況において、特定の目的を達成する手段」である。おそらくそのことに例外はない。だとすれば、この定義はあらゆる「方法」と呼ばれるものに共通する「方法の原理」ということができる。したがって、どのような状況で何をしたいかということ抜きに「絶対に正しい方法」といったものは成立しえない。そしてこの「方法の原理」に照らせば、方法の有効性は 1) 状況と(2) 目的から規定される、ということになる。したがって、その都度「状況」をみながら「目的」を実現するための有効な方法を打ち出していけばよい。

以下、その使い方を具体例に則してみよう。話は戻るが「ふんばろう」を立ち上げるきっかけとなったのは、震災発生から3週間後に支援物資を持って南三陸町に行った時に感じた「個人の力の限界」であった。物資は大きな拠点避難所には届いていても、小さな避難所や個人避難所には十分な物資は届いておらず、持っていった物資はあっという間になくなった。そこで、「こうした状況に対応するには、全国の何とかしたいと思っている人たちの力を結集して大きな支援の力にする仕組みを作るしかない」と考えたのである。

7...西條剛央⁷ 看護研究で迷わないための超入門講座 研究以前のモンダイ⁷ 医学書院 2009年

8...Husserl, E. (1976) Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie. Haag: Martinus Nijhoff, S. 192. (細田恒夫・木田元(訳) ⁸ ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学⁸ 中央公論新社 2006年)

9...竹田青嗣⁹ 現象学は 思考の原理 である。筑摩書房 1994年

10...西研¹⁰ 哲学的思考。筑摩書房 2005年

11...Rombach, H. (1971) Strukturontologie: Eine Phänomenologie der Freiheit Verlag Karl Alber GmbH Freiburg/München, Germany (中岡成文 訳)
¹¹ 存在論の根本問題: 構造存在論。晃洋書房 1983年)

12...Saussure, F. de. Komatsu, E. ed. (1910-1911) Troisième cours de linguistique générale. Oxford: Pergamon. (ソシュール, F.(著), 影浦峯・田中久美子(訳) ¹² ソシュール一般言語学講義 コンスタンタンのノート。東京大学出版会 2007年)

Saussure, F. de. 1910-1911 Troisième cours de linguistique générale: D'après les cahiers d'Emile Constantin. Pergamon Press. (ソシュール, F.(著), 相原奈津江・秋津伶(訳) ¹² 一般言語学第三回講義 エミール・コンスタンタンによる講義記録。エディット・バルク 2003年)

13...丸山圭三郎¹³ ソシュールを読む。岩波書店 1983年

14...池田清彦¹⁴ 構造主義科学論の冒険。毎日新聞社 1990年(池田清彦¹⁴ 構造主義科学論の冒険。講談社 1998年)

15...現在書籍/論文だけで200本以上が公刊されている。以下の構造構成主義文献¹⁵スト参照。https://sites.google.com/site/structuralconstructivism/home/literature_database

「ふんばろう」で最初につくった仕組みはシンプルなものだ。私たちが現地で必要な物資とその数を聞き取り、ホームページに掲載する。その情報をtwitterで拡散し、全国の支援者から物資を宅配便で直送してもらおう。「何をどこにどれだけ送った」という報告だけはしてもらおうにして、必要な個数が送られた時点で、その物資に線を引き消していくのである。この仕組みなら、仕分ける必要もなければ、どこかで物資が滞ることもなく、必要以上に届くこともない。「いつでもどこでも誰でも、必要としている人に必要なだけの物資を直接送ることができる仕組み」を作ったのである。

このように方法の原理により、被災地の状況に対応する新たな方法を作り出したのである。

(3) 前例主義に捉われないためのツールとしての「方法の原理」

この震災では、日本の組織が抱える構造上の問題が、さまざまな形で露呈したといえる。たとえば、被災地では、500人いる避難所に300枚の布団が届いたが、数が足りないために全く配らないといった理不尽が各所で起きた。800人いる避難所に700個のケーキが届いても、人数分ないからといって断る。100人以上が暮らしている避難所にもかかわらず、震災から4ヶ月以上が経っても「問題が起きたら困るから」と洗濯機を1台も設置せず、扇風機の受け入れも断るといった不合理を目の当たりにしたこともある。あるいは、人数分ないからといって野菜を配らずに腐らせてしまう避難所など、行き過ぎた「公平主義」によるこうした不条理は被災地のあちこちで見られた。

こうした不条理が起きてしまう要因の1つとして「前例主義」がある。特に行政のような組織では、たとえ個人的には良いことだと思っても、前例がないと、失敗した時に責任をとらなければならない、という思いが頭をよぎるのである。多くの場合アイデアが生まれないのでなく、アイデアを組織がつぶしているのである。

たとえば、あるアイデアを提案した時、上司から「君、それは前例がないね。うまくいく保証はあるのかい？」失敗したらどう責任をとるつもりだ。君だけの責任では済まないんだよ」といわれると、身動きとれなくなってし

まう。これは、新たなアイデアをつぶす「必殺のセリフ」なのである。大きな組織になればなるほど、このような環境の中でアイデアを実行に移すのは容易ではない。

これは「勇気を持って臨機応変に対応すべきだ」という正論を言って済む話ではない。なぜなら、これは突き詰めればアイデアの「正当性」を担保できるのか、という問題だからだ。よく考えてみると、「臨機応変」といえば聞こえはいいが、正当性を担保できない限り、「場当たり主義」「ご都合主義」と区別をつけることができず、そう言われても反論できないのである。だから行政のように税金で成り立っている公的な組織ほど「責任回避バイアス」が働き、臨機応変な対応が難しくなる、という側面があるのだ。

そもそも、組織が前例主義に陥りやすいのは、本来の「目的」をしっかりと共有せずに、「方法」を共有してしまうことが大きい。そのために、前提となる状況が変化しているにもかかわらず、従来の方法を遵守してしまうのだ。これを「方法の自己目的化」という。たとえば、先の例で300枚の布団が1枚も配布されなかったのは、自治体が「公平性を保つ」という平時の方法にとらわれていたためだ。それを守ろうとするばかりに、「被災者の生活を支援する」という本来の目的がないがしろにされてしまったのである。

そこで必要になるのが、そのアイデアを実行すべき正当な理由を提示する方法だ。新たな方法が正当である理由を提示することができれば、「責任回避ゲーム」に終止する必要がなくなり、建設的に代案を出し合えるようになる。そのためにも「方法の原理」は役に立つのである。方法の原理を使えば、前例のないアイデアでも、状況と目的から導き出された有効な方法である、といった形で提案することができ、周囲の批判や責任回避バイアスにとらわれずに正当性を担保しながら実行できるようになるのだ。

(4) 「方法の原理」により状況に応じて柔軟に方法を変える

私は「ふんばろう」のことを「市民意思機能」と捉えている。運営をフェイスブック上でやっている「ふんばろう」は、明確な境界線を持つ組織ではなく、「被災者支援」という目的のもと、企業や団体の壁を越えて、誰でも入

日本最大級となった「ふんばろう 東日本支援プロジェクト」は、
どのような支援をどのように実現したのか？～構造構成主義を基軸としたボランティアリテラシーの射程

ることができ、それぞれができる範囲でできることをしていくゆるやかな「機能体」である。そのもとは、機能しさえすればいい、という考えがある。

立ち上げた当初から、「鯨ではなく小魚の群れになろう」ということを言ってきた。つまり、行政や大企業といった大きな組織（鯨）のパワーは凄いが、当時の被災地のように状況やニーズが時々刻々と変わっていくような状況においては、機動性と臨機応変性が求められる。動きが遅いあまりにタイムラグが生じて、必要ではなくなったものが大量に届いても邪魔になるだけである。そうした状況では、小魚の群れのように一瞬で方向転換できるような「機能体のほうが力を発揮しやすい。

「ふんばろう」は、方法の原理をはじめとするこうした考え方にに基づき、その時の被災地の状況を踏まえ、「被災者支援」という目的に沿って活動を進めてきた。一例として、状況の変化によって取り組みを変えてきた一連の「家電プロジェクト」を紹介しよう。もともと、仮設住宅には日本赤十字社から家電が配布されるのに、半壊した自宅に戻っている自宅避難民やアパートなどで暮らす被災者には家電が配布されないという理不尽な状況があった。そこで2011年5月には、こうした「支援格差」を埋めるべく、家庭で使われていない家電を回収して送る「家電プロジェクト」を立ち上げたのである。このプロジェクトは、東京を中心として各地で家電が収集され、岩手県の山田町、釜石市、宮城県の気仙沼市、南三陸町、石巻市、東松島市、仙台市、福島県の南相馬市、会津若松市などの被災者に届けられたのである。

やがて夏になると、節電が求められ全国的に扇風機が品切れになる中、被災地ではまったく扇風機が手に入らず、扇風機が大量に必要なった。しかし、各家庭から中古家電を集めて被災地に送るという従来の方法では、実際に各家庭で扇風機が使われている中、大量に集めることはできない。そこで、専用のECサイトを立ち上げ、支援者に家電を購入してもらいそれを必要とする被災者に届ける新たな方法を開発したのである。

さらに冬が近づくと、東北各地だけでなく全国にも未だに支援が受けられない被災者がいる状況を踏まえ、そうした被災者を見つけるために、地元メディアや全国紙

に大々的に告知を載せ、それを見た被災者に罹災証明書のコピーと希望の家電を書いて送ってもらい、支援が必要と判断された家に直接希望家電を送るといった新たな方法を提案した。この方法なら、支援を必要とする人がどこにいても直接届けることができる。しかし、この方法は誰もやったことがなく、申し込みがどれだけくるのか読めないリスクがあり、内部でも反対の声はあった。それでも決行したのは、活動の目的が、リスクを避けることではなく、自宅避難者などに支援が行き渡らない「支援格差」を埋めることであり、その目的に照らせばやるしかない決断できたからだ。当初5000世帯分の予算に対して3倍近く申し込みが殺到したが、足りない分はさらに冬物家電のキャンペーンを行うことで、1万4000世帯に冬物家電を届けることができた。

こうした活動を可能にするために、「ふんばろう」では方法の原理の考え方をプロジェクトの基本的な考え方としてホームページに明示し、早い段階から共有するようにした。当初は、どこで何が起きているのか、誰にもわからない状況だったので、その時の状況を見て、「よい」と思ったことを現場判断で自律的にどんどん進めてもらうために導入したのである。状況と目的から最適な方法を導き出す方法の原理は、現場判断による臨機応変な対応を担保するためにも機能する。

今の日本の多くの組織は、方法の原理が根づいていないために、経験的に培った方法を踏襲することに偏りがちだ。そのため、本来の目的を重視するよりも、方法を遵守する「方法の自己目的化」に進みやすい。だから、未曾有の災害や変化の激しい時代にうまく適応できない状況に陥ってしまうのだ。

これは被災地に限ったことではない。状況の変化は加速する一方であり、今年通用した戦略や方法が来年も通用する保証はない。状況が変われば、方法も変える必要があるのだ。方法の原理をリテラシーとして共有できれば、その組織は前例主義の硬直した状況を打開していくことができる。そういう組織でなければ、これからの時代は生き残ることは難しいだろう。

(5)「状況」の把握を間違えると必ず失敗する

震災から数ヶ月の間は、被災地全体の状況を把握して

いる人は、国も含めてどこにも存在しなかった。なぜなら何十万という被災者がおり、千を超える避難所の統合や解散が各地で起こっており、情報を集約するはずの地元自治体が壊滅的な打撃を受ける中、被害が酷いほど情報があがってこないという状況だったためである。全体の情報を把握してコントロールするという従来の方法が通用しない状況だったのである。

そんなときはその場その場で「状況」をみて判断する他ない。そのため、方法の原理を共有することで、被災者支援という目的からぶれることなく、その都度「状況」をみながら、どのようなやり方がよいかを考えて実行しやすくした。

現場主義が大事だ、現場判断を尊重すべきだ、自分の頭で考えることが大事だとはよく言われる。しかし、現場判断を間違えることもある。「自分の頭を使って考えるべき」と言われてもどのように考えればよいかわからない、という人もいるだろう。現場判断を大きく間違えないためには、「状況」と「目的」を見定めながら考えることが有効である。逆にいえば、大失敗するときは、状況把握を間違えたり、いつの間にか目的がぶれているものなのである。原理とはそれに沿っていれば必ず成功するというものではないが、それから外れた場合には必ず失敗する。

実際に、某大企業は2011年の4月半ば頃、「新たな支援システムを開発しました」と高らかに宣言したが、結局何の役にも立たなかった。それはiPhoneにソフトをダウンロードして使う仕組みだったためだ。現地ではiPhoneを持っている人は少なく、ましてはソフトをダウンロードすることができる人はほとんどいなかったのだ。被災者支援という目的は素晴らしかったが、状況を正しく把握できなかったのだ。このように状況把握を間違えれば、何億円かけたとしてもアウトプットはゼロになる、ということもあるのだ。

そうならないためにも、「方法の原理」を視点として、リーダー自ら「現場」に行き、その状況を肌で感じてくる必要があるのだ。

(6) 目的からぶれないためのアンカーとしての「方法の原理」

また明確な「目的」を立てて、それを組織で共有する

ことは、活動がブレないためにも重要になる。「ふんばろう」を立ち上げた時点で、目的は「被災した人達が前を向くための条件を整えることです」と宣言した。つまり「被災者の自立のサポート」が「ふんばろう」の目的である以上、なんでもかんでも支援すればよいというものではない、ということを目的に組み込んだのである。支援活動はやりがいがあるために、ややもするとそこに依存してしまうことは容易に想像できる。万が一にでも「被災者がいなくなったら困る」と思ってしまったならば、それは本末転倒なのである。

「目的からぶれない」、これも一見すると当たり前のことだが、それを徹底できることは稀と言っていい。実際、最初に「家電プロジェクト」を実施しようとしたとき、「ふんばろう」の現地スタッフから「公平に家電を渡せなければ、問題が起こる可能性があるからやめてほしい」と反対意見が出たことがある。私は「『ふんばろう』の目的は被災者支援です。問題を起さないことが目的ではありません。被災者支援が目的である限り、やめるという選択肢はないです」と説得して納得してもらうことができたが(後ほど詳述)、このように「被災者支援」が目的なはずなのに、いつのまにかそうではないことに「関心」がすり替わってしまうことはめずらしくない。実際、某家電量販店は「家電プロジェクト」と同様のプロジェクトを行おうとしたものの失敗を恐れ、実施する前に頓挫してしまったのである。「方法の原理」は、「そもそも何のために?」と問い直すことで、目的に自覚的に立ち戻るためのリマインダーとしての機能も果たすのである。

(7) 「方法の原理」により組織の成長段階にあわせてあり方も変える

また当初、「5%理論」という考え方も共有するようにはしていた。刻々と変化する被災地の現状に対応して迅速に動き続ける以上、失敗をゼロにすることはできない。また何をしても必ず批判する人はいる。失敗や批判をゼロにしようとする、途端にリスク管理に膨大なコスト(時間と労力)がかかるようになり、その分、被災地支援に向ける力は大幅に減じられてしまう。そこで私は「『ふんばろう』は、被災者支援が目的である以上、5%以内の失敗やミスを気にしていたら何もできなくなるか

ら、その範囲のものは気にしないでいこう。ただし、目的と状況をしっかり見据えて大きな失敗はしないようにして、よいと思ったことはどんどんやっていこう」と言い続けた。実際、まあそれは5%以内だからいいでしょう」といった会話は各所でみられたことから、本質的な問題かどうかを見定める視点としてかなり有効だったようだ。

その後「ふんばろう」は急速に大きくなり、日本最大級のプロジェクトといわれるようになり、注目度もあがってきた。それと同時に、被災地は食料や家電がないといった緊急的な状況ではなくなってきたため、組織のリスク管理に割くエネルギーの割合を増やしていった。知名度が高いということは足下を救われる可能性も高くなるということを意味するためだ。やはり組織が大きくなってくると持続可能を担保するためには、被災地支援という機能を失わない範囲で、リスク管理に力を入れることも必要だ。ゲームにたとえれば、ほとんどを攻撃力に振り分けていたパラメータを、防御力にも一定程度振り分けるようにした、ということである。ここでも状況が変われば、どのようにしたほうがよいかが変わるといって「方法の原理」を踏まえて、組織の力点を変えていったのである。

(8) 人間の原理：すべての人間は肯定されたい

組織運営で大切なことは、「人間の心」に反しないことだ。「ふんばろう」を運営するうえでも、そこから外れないよう心掛けた。たとえば、人間は肯定されることや「快」と感じることは続けることができる。そのため、ほめたり、感謝するなど、快適な環境を提供することが大切になる。

間違えやすいのは、「こうすべきだ」と正しさをコントロールしようとする事だ。人間は必ずしも正しさに沿って生きるわけではない。このことは、人材育成の原則でもある。行動主義の強化の原理を持ち出すまでもなく、人間は認められたり、ほめられたりすれば行動するし、否定されれば行動しなくなる。これは至極「当たり前」のことである。しかし、当たり前のことがきちんと実践されることは少ない。たとえば、がんばって何かを成し遂げた直後に、悪かった点や足りなかった点にクローズアップする「反省会」はがんばったこと自体を否定

することにつながる。だから「ふんばろう」では反省会はしない。どんなに反省してもやる気が失われ、反省が次にかされる前にやめてしまったら意味はない。逆に、高いモチベーションさえ維持されていれば、自然と「よりよい活動にしよう」と改善されていくものだ。

たとえば、ダイエットをしたことがある人は多いと思うが、なぜ続かないか。それはダイエットしているときに、「昨日はつい食べ過ぎてしまった、罰として今日は食べないようにしよう」とダイエットをがんばっている状態を否定するからである。こうしたことから、実際はいかに望ましい行動を“しないように”マネジメントしているかがわかる。したがって、ダイエットを無理なく成功させるためには「いかにダイエットしている状態を肯定し、“快にしていこうか”という視点で取り組む必要があるのだ。

(9) 組織の最強のマネジメント方法は「感謝」

特にボランティアをがんばっている人ほど、他人に対して「なぜもっとがんばらないんだ!」となりがちだ。仕事としてお金を払っているならまだしも、生活も仕事もある中で、時間と労力を割いて尽力しているのにそんなことを言われたら「感謝されたくてやっているわけではないけど、そんなこと言われるぐらいならやらないよ」となるのも自然なことだ。少なくとも無給のボランティアは「やる気が全て」である。やる気がなくなれば翌日からこなくなるのである。そうして多くのボランティア団体は、内部崩壊していくことも珍しくない。

では、どうすればよいのか? 「正しさ」を基準に「減点法」で相手の足りないところを見る思考パターンは批判の応酬を招くことになる。「否定」したら「否定」されるのである。だから、正しさによる減点法ではなく、「感謝」による加点法が大事だ。その人がしてくれたことに意識を向けて、まずは感謝することが建設的なやり取りや関係性につながっていく。

人間は肯定されたいという関心を持っている。これはほとんどすべての人間に当てはまる「根本関心」、あるいは「本能的関心」といって「人間の原理」なのである。ボランティアは無料奉仕である以上、「やらない」がベースラインのはずだが、がんばっている人にとってはや

る」が当たり前で、やらない人に対してもっとやるべきだと思ったり、つい足りないところに目をむけがちである。そういうときは、自分が関心のない活動に関わったことを想像してみる必要がある。そうすれば「やらない」がスタンダードであるとわかるはずだ。

そう考えれば、少しでも尽力してくれる人は、有難い存在になる。そういう認識を持っていけば「そのぐらいやって当たり前だ」ではなく、「いつも忙しい中尽力してくれてありがとうございます」という言葉が自然に出てくるはずだ。それは個人レベルだけでなく、団体運営においても、他の団体に対しても、そうした大きな視点を持つことで、それぞれ志のもとにがんばってやっていること自体に目を向けることができ、寛容になれるはずである。

人は感謝しながら否定することはできない。誰かに感謝しているとき、自分も「有難いなあ」という気持ちで満たされていることに気づくはずだ。その気持ちをそのまま伝えれば、感謝された人は、肯定されるわけだから、嬉しくないわけがない。感謝されたいからボランティアをしているわけでもなく、人間はどこかで肯定されたいという気持ちを持っているため、感謝されて嬉しくない人はいないのである。すると「こちらこそいつもありがとうございます」となり、お互いを肯定しあいながら、それがエネルギーとなって気持ちよく活動が進んでいく。それがボランティアに限らず組織運営の理想的なあり方だと考えている。

(10) 定期的な休暇やボランティアのケアも仕組みとして必要

また他人に寛容になるためには、自分にも寛容にならないといけない。あまり無理してがんばっている状態が続くと、コップいっぱいになつたような余裕のない精神状態になり、「自分はこれだけやっているのに！」とちょっとしたことで過剰な怒りになるため、定期的に休んだり、リフレッシュすることも大切である。また個人の判断に任せると時々ブレーキが掛けられなくなる人が出てしまうので、ボランティアといえど定期休暇をとる仕組みにしておいたほうがよいだろう。実際「ふんばろう」ではそうしてきたし、CEJ(Cure East

Japan) というボランティアのケアを無償で行う後方支援があったために、大変な時期も乗り切れたというところが少なくない。

3. ボランティア同士の信念対立をどのように解消していくか？

(1) ボランティア同士の信念対立

ボランティア活動を行う上で気をつけるべきことは、「信念対立」だ。異なる正しさをぶつけ合うことで、争い、消耗して、本来の目的を実現できなくなることは避けなければならない。しかし、組織が大きくなると、どうしても意見のずれ違いが生じて、相手を批判してしまうようなことも起きやすくなる。

またTwitterなどで、他の団体などに対して非難を繰り返す人もいるが、それが全体としての復興支援活動を見るとマイナスに作用していることは少なくない。支援者同士の争いや、ボランティア同士の争いは見るに堪えず、そうしたやりとりをみている支援者のエネルギーを大きく削いでしまうのである。

よく考えれば、自分が助けたい人達を助けている人を責めるのだから、不思議な感じがするかもしれない。では、「被災者支援」という同じ目的の下で行動しているにもかかわらず、なぜ意見の相違が起きてしまうのだろうか。なぜ起きるのかわからなければ、対策のしようがなく、「なんで仲間なのに仲良くできないんだ、みんな仲良くしようよ」といった類の正論をいうことしかできない。これでは、何ら根本的な方法を提供してはいないことになる。仲良くしたいのはやまやまだがなぜか仲良くできない、というのが問題の核だからだ。

この問題を構造主義の観点から根源的に考えていこう。

(2) 価値判断を根源的に問い直す：関心相関性と契機相関性

「それはよい/そんな間違っている」というとき、それはすべて「価値」について言及しているといつてよい。「よい/わるい」というのはすべて価値判断に他ならないからだ。

では、価値とは何に照らして見出されるのだろうか？

日本最大級となった「ふんばろう 東日本支援プロジェクト」は、
どのような支援をどのように実現したのか？～構造構成主義を基軸としたボランティアテラシーの射程

構造構成主義では、この問いに答えるために「関心相関性」という中核原理を基軸に「価値の原理」として定式化されている。

関心相関性とは、思想的には、竹田¹⁶が、ニーチェ (Nietzsche, F.)¹⁷の「力の思想」やハイデガー (Heidegger, M.)¹⁸の気遣い(関心)の議論を踏まえて、「欲望相関性」として概念化したものを、フッサール¹⁹の志向性によって基礎づけ、構造構成主義の中核概念として定式化したものである²⁰。たとえば、普段は何の価値もなく目にも入らない水たまりも、広大な砂漠で死にそうなほど喉が渇いていたならば、貴重な存在として立ち現れ、代え難いほど高い価値を帯びることになるだろう(関心相関性を詳記すれば、「身体・欲望・関心・目的相関性」というものとなるが、本稿では「関心相関性」という表記を採用する)。

この「関心相関性」を「価値の原理」に焦点化していえば、「すべての価値は、欲望や関心、目的といったことと相関的に(応じて)立ち現れる」ということになる²¹。つまり、関心相関的観点からみれば価値がある/ない、「よい/わるい」「賛成/反対」といった価値判断は、当人の関心や目的に応じて立ち現れている、ということを実感的に認識できるようになるのだ。

では、その「関心」は何によって生じるのか。それは「契機」、すなわち何らかの「きっかけ」があって「関心」を持つようになるのである。これは桐田がロムバツハの議論を経由して定式化した「契機相関性」に基づく考えである²²。

つまり、関心相関性と契機相関性によれば、何らかの「きっかけ(契機)」によって何らかの「関心」を持つようになり、その「関心」に応じて物事の「価値判断」をするようになる、ということがわかる。これをボランティア活動に当てはめてみれば、活動のよし悪しが「経験」

や「関心」に応じて判断される、ということになる。そして、なぜ同じ目的のもとで活動しているはずなのに、価値判断がずれてくるかといえば、同じ目的の下に活動していても異なる経験をする(異なる関心を持つきっかけがある)ためだ、ということがわかる。

たとえば、電話窓口班は避難所からの連絡をたくさん受けるという経験をするため(契機)、避難所に一つでも多くの物資を届けたいという関心が生まれる。一方、支援者からの寄付を募るECサイト班は、支援者の声がたくさん届くため、支援者の声に応えたいという関心を持つようになる。このように、きっかけとなる経験が少しずつ異なるために、価値判断の基準となる「関心」も異なり、そのことに気づかないために同じ方法について是非が分かれてしまい、衝突が起きてしまう、ということが起こるのだ。

このような衝突を解決するには、互いの意見を「良い/悪い」という価値のフェーズに終始せず、その背景にある「関心」や「経験(契機)」のフェーズにまでさかのぼって理解することが大切だ。異なった経験からさまざまな関心を持ち、それがずれていることによってぶつかるということがわかれば、互いを頭から批判することなく、理解しあえる可能性が生まれる。互いの意見が異なったら、その意見がどういう関心から導き出されているのかを理解し、相手の関心を自分の中に取り込んだ上で、組織の目的に照らして両者の関心を両立させたり、あるいはより妥当な意見を採用すればいいのだ。

たとえば、先に「家電プロジェクト」を実施する際に現地のスタッフから反対意見が出たといったが、その際に上述した「契機-関心相関的観点」から、次のように対応した。まず、なぜそのように思うのかを聞いていくと、どうやら現地で物資配布する中で争いが起きたりするのを目の当たりにしたことからの「契機」、「同じように並

16...竹田青嗣『現象学は 思考の原理 である』筑摩書房 1994年

17...Nietzsche, F. (1880-1888). Der Wille zur Macht. 原佑(訳)『権力への意志(上・下)』筑摩書房 1993年

18...Heidegger, M. (1927). Sein und Zeit. Halle a.d.S.:Niemeyer.(細谷貞雄(訳)『存在と時間(上・下)』筑摩書房 pp.25-101(上) 1994年)

19...Husserl, E. (1976). Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie: Eine Einleitung in die phänomenologische Philosophie. Haag: Martinus Nijhoff, S. 192.(細田恒夫・木田元(訳)『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論新社 p.141 2006年)

20...文献[5], 4章

21...西條剛央『構造構成的組織論の構想 人はなぜ不合理な行動をするのか?』早稲田大学国際経営研究 42,99-113 2011年

22...桐田敬介『契機相関性の定式化へ向けて 構造構成主義におけるその都度性の基礎づけ』構造構成主義研究 3, 159-182 2009年

んだのに家電を貰えない人が出てしまうことでいざこざが起きたり、苦情がくることを避けたい」という関心を持っていることがわかった。そこでその関心を取り込んだ上で、事前に告知せずにゲリラ的に配布していくことで行列ができないようにして、それでも足りなかった時のために生活物資を用意しておくことを提案した。また行政からの配布ではなく貰えるのが当たり前ではないことをわかってもらえるようにアナウンスするなど工夫することで苦情が出ないようにして実施しましょう、と納得してもらった上で、被災者支援というプロジェクトの目的からぶれることなく実施することができたのである。

(3) ボランティアエリート の弊害

ボランティアは、「現場に行かない人は本物ではない」という偏った「現場主義」に陥りがちである。ある新聞社の記者が、休日に瓦礫の片付けのボランティアに行ったところ、長期間ボランティアに入っていた人から「たまにくるぐらいじゃダメだ」と言われて現地に行けなくなってしまった、という話をしてくれたことがある。そのボランティアががんばって100働いたとしても、たまにくるボランティアを否定することで、10働いてくれる人を20人なくさせたら、全体としてはマイナス100になり、大きな損失になってしまう。これではその人は満足しても、俯瞰的にみればその人がいないほうが復興支援活動にとってはプラスということになってしまう。そのような善意の空回りにならないためにも、契機・関心相関的観点から洞察することは有効だ。現地にボランティアに行くと、そこで困っている人をたくさん目の当たりにして、自分ががんばることで喜んでもらえるといった経験を。それが「契機」となり、よりいっそう現場で働くことに「関心」を持つようになり、その関心に照らして現場で長期間働くことに「価値」を見出し、実際に長期滞在しながらボランティアを行うようになる。そうすると、たまに現場にくる「ボランティア」には価値を見出さず、「にわかボランティアはダメだ」とか「偽物だ」とか言い出すようになってしまうのである。このように自分の価値判断(確信構造)がいかにして形作られているか(構成されているか)を認識することができるようになれば、そうしたナイーブな批判をすることな

く、全体的な視野からみてもより効果的なボランティア活動を行うことができるだろう。

(4) 関心の高さ と正しいことをしているという思いが信念対立を助長する

ボランティアはそれが何であれ、必ず関心が高い人が集まる。関心が低ければやらないから当然である。人は関心に応じて価値を認識するため、関心が高いと微細な差にクローズアップするようになる。その結果、ちょっとした違いが許せなくなるということがあるのである。しかもボランティアは、「善意のボランティアでやっている自分は絶対に正しい」と思いがちだ。「自腹を切っ

て困っている人達のための時間と労力を割いているのだから、自分が正しい」といったように自分の正しさを無自覚のうちに確信してしまう要因がたくさんあるためだ。関心が低ければ、いろいろな考え方があっていいんじゃないかなと思えることも、関心が高いために強いこだわりを持ち、善意ゆえに自らを絶対視してしまいがちになる。そのために、マクロでみれば同じ志を持つ同志のはずなのに、違う考え方の人を非難してしまうということが起こる。かくいう私は、他のボランティア団体を批判したことは一度もないが、しかし他団体からいわれない非難をされたときには、なぜこれだけ一生懸命やっているのに実情も踏まえ非難してくるんだ、と思い、痛烈な反論をしたこともある。そのときも上記のことはわかっていたつもりではあったが、後から思えば、「自腹を切っ

て困っている人達のためのこれだけの時間と労力を割いているのだから自分が正しい」とどこかで思っていたことは否めない。そうした認識態度を持っていると、それは相手にも伝わることため、より批判してくるという悪循環を招く。

(5) 他のボランティア団体は競争相手ではなく、同志である

そもそもボランティアは競争ではない。他の団体と比

日本最大級となった「ふんばろう 東日本支援プロジェクト」は、
どのような支援をどのように実現したのか？～構造構成主義を基軸としたボランティアテラシーの射程

較したり、他の団体の価値を下げて自分の価値を高めるといったことに意味はない。同じ「被災者」、すなわち自分が助けたい人達を助けているわけだから、どこに所属しようが同志のはずだ。自分の立場だけが正しいと主張する必要はなく、誰がどんな方法で助けたってよいのだ。また「被災者の自立につながる支援」「被災地の復興支援」が実現できるのであれば、自分(達)だけでやる必要もないのだ。

4. ボランティアの未来

上述してきたように、ボランティアには、多くの場合、関心が高く真面目に取り組むからこそ、善意のぶつかり合いにより消耗し、内側から崩壊していつてしまう、といった落とし穴がある。

「原理」とはそれに沿えば必ずうまくいくという類のものではないが、それから外れると必ず失敗するというものだから、「構造構成主義」は支援活動を行う上で少なからず役に立った。それを視点とすることで、そうした落とし穴に落ちないように意識的にマネジメントすることができたからである。

ただしこれらは「正しい考え」ではまったくなく、そ

うではなく、状況と目的に応じて有効性を発揮しうる“思考のツール”なのである。以上論じてきた内容で使えるところがあれば、どんどん取り入れて自分の使いやすいようにカスタマイズしてもらえれば嬉しいし、足りないところがあればどんどん改善してよりよい支援を実現していってもらえればと思っている。

多くの人々が、構造構成主義のような「ボランティアテラシー」を持つことによって、気持ちよくボランティア活動を継続し、さらに大きな支援を実現することもできるようになるだろう。私も微力ながら「ふんばろう」以外にもこうした考え方を広く伝えていきたいと考えているが、そうしたボランティアテラシーを高める活動は十分できておらず、それはこれからの課題である。より詳しくは『人を助けるすごい仕組み』²³も参照していただき、もし響くところがあればこうした考えを広めて行っていただければと思う。そうした草の根の活動が「ボランティアの未来」をさらに明るく照らすと信じている。

以上、拙論が少しでもボランティアに携わる皆様のお役に立てたら幸甚である²⁴。

(さいじょう・たけお)

23...文献[3]

24...東北出身のひとりとして、東日本大震災の復興支援に尽力して下さったすべての皆様にこの場を借りて心から御礼申し上げたい。